

Charles Dickens: *Mrs. Lirriper's Legacy*

1864年のクリスマス作品

篠田 昭夫

英語教育講座

平成14年9月10日受理

ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)は1864年のクリスマス作品として *Mrs. Lirriper's Legacy*¹⁾を、自身が経営と編集に全責任を負っていた週刊雑誌 *All the Year Round*²⁾に発表した。これは *Christmas Stories*に収録されているクリスマス作品としては17番目の、そして *A Christmas Carol*(1843)から数えると、総計25篇に達するディケンズのクリスマス物の作品群の中では22番目にあたる作品である。7章立ての *Legacy*も他のクリスマス作品と同じく、ディケンズを含む6人の作家が分担執筆した作品の联合体という形式をとっていて、掲載順に記すと、その構成は以下のようである (*AYR*のvol. 12に記載されている)。

Mrs. Lirriper Relates How She Went on, and Went over

by Charles Dickens (pp. 1-11)

A Past Lodger Relates a Wild Story³⁾ of a Doctor

by Charles Collins (pp. 11-18)

Another Past Lodger Relates His Experience as a Poor Relation

by Rosa Mullholand (pp. 18-24)

Another Past Lodger Relates What Lot He Drew at Glumper House

by Henry Spicer (pp. 24-35)

Another Past Lodger Relates His Own Ghost Story

by Amelia B. Edwards (pp. 35-40)

Another Past Lodger Relates Certain Passages to Her Husband

by Hesba Stretton (pp. 40-47)

Mrs. Lirriper Relates How Jemmy Topped up

by Charles Dickens (pp. 47-48)

ディケンズ自身の手になる と を取り上げる前に、他の作家が寄稿したから までの5篇について少し触れておくこととしたい。リリパー夫人(Mrs. Emma Lirriper)が経営する下宿屋にかつて居住した下宿人達が、父親の友人のフランス人から託された手記を公開するという体裁をとって三人称体で叙述されている を除くと、記憶に焼き付いて離れない各自の特異な体験談を回顧する体裁をとって、一人称体で叙述が展開されるという共通項を持っているのである。

三人称体で構成されている の舞台はフランス革命前夜のパリ。毒を仕込んだ料理を供する秘密パーティを自宅で開催することで、人生に飽き疲れた者を命と引き換えに恍惚境に送り出す “ the means of suicide ” (13)を持つベルトラン医師(Dr. Bertrand)の許を訪れた、失恋のショックで自殺願望にとりつかれたアルフレッド・ド・クレルヴァル(Alfred de Clerval)をめぐる物語である。熱愛していた美女をわが者としたライヴァルであると思い込んでいた人物が秘密パーティにおいて何と主人公の隣りに座していて、忘れようにも忘れられないテレーズ(Thérèse de Fareilles)という名前を交えながら、何も知らないまま喋りたてるその男よりテレーズが愛しているのは当の自分であることを知らされたアルフレッドは、際どいところでベルトラン医師の召使いの手引きによりパーティの部屋から脱出することができたのであった。ライヴァルであ

った男は毒を仰いで息絶えてしまい、残りの参加者達が「裏切り者」と叫びながら襲い掛かってくる中で、九死に一生を得たというのである。料理そのものは食していなかったとしても毒素をたっぷり吸い込んでいた主人公は回復に長い時間が掛かりはしたが、終局的には目出度くテレーズ嬢の愛を得たという(18)。ベルトラン医師の所業は官憲の知るところとなり、カイエン又近郊の刑務所に投獄されたということで、 は終幕となるのである。

からは一人称体による叙述が続くこととなるが、本篇の主人公兼語り手はガイ・ラトランド(Guy Rutland)なる南アメリカへ渡ったものの運が開けぬまま15年振りに母国イギリスへ帰ってきた男。裕福な従兄ジョージ(George Rutland)を頼り身を寄せるが、当然のことながら無視され冷遇される。友人の遺子ということで引き取られてはいるものの同じく冷遇されていたティーシー・レイ(Teecie Ray)という18歳の松葉杖が頼りの足の悪い乙女との間に、主人公ガイは連帯感と友情が通い合う関係が生じることとなる。そして、言葉だけでなく金銭的援助まで時々してくれる近所に住む金持ちの老婦人が主催するクリスマス・パーティへ無断で出席した二人は、怒り狂ったジョージより即刻の退去を求められ、その足で教会で結婚式を挙げた後外国へ出て世界を見て回る。その間にティーシーの足も治癒し、母国へ帰った時には百万長者夫人となり松葉杖なしで歩く姿を見た親類縁者の誰もが、彼女と認めることができなかった(24)と記述されている。いかにもクリスマス作品らしい奇跡物語といってよいものではあるが、細部に相当な飛躍と無理な甘さが感受される作品であることは否定できそうもない。

の主人公兼語り手はチャールズ・トリローニイ(Charles Trelawny)なる人物。タイトルにもあるグランパー・ハウスという私塾学校で寄宿生として勉強していたことが、主人公の波瀾万丈の人生行路の発端となったのである。学校

の余りにもひどい食事に耐えかねた生徒達は、くじ引きで当たった者にこのままでは飢えで死にかねない状態にある事実を外部（両親や友人）に訴えさせることと、それが上手く行かない時は学校から脱走させるという計画を立てる(26)。そのくじを引き当てたのが本篇の主人公であったという次第。海軍中将の父親に窮状を訴える手紙を出したが、結局は食事の改善に結び付かず、脱走者の役回りを引き受けざるを得なくなり、ロンドン北部の郊外にあった学校から脱走してロンドンへ向けて歩き出したのであった。

チャールズは以前学校に在籍して彼を可愛がってくれた先輩を思い出し、父親と共に今は醸造会社を経営しているその人物の許に身を寄せるが、軽率な行動を諭された上に両親へ即刻手紙を書くように勧められ、それに応じて事情を説明した手紙を出す。この後先輩の所を出て間借りをすると共に、チャールズは運を開くべく丁稚奉公の口を求めるが空振りに終わり、たちまち困窮状態に陥ってしまう。そうした時に疲れ切ったユダヤ人の老乞食になけなしの6ペンスを与えてしまったのである。

ところが、身なりを整えて先刻のみすぼらしさは消えていた老乞食と同じ日の夕刻再会した主人公が、その空腹を抱えた哀れな姿に相手の同情を受けて夕食に誘われるという、何とも妙な逆転関係が現出する。そして、その老ユダヤ人の住まいでチャールズは孫娘という15歳くらいのゼル(Zell)という美少女と出会い、全くの夢心地で食事を終え、そのままベッドへ直行する。この時主人公は11歳であったという(32)。貧しいこともあるが、乞食同然の格好しかしない程の守銭奴である祖父により外出用の衣服を与えられないゼルは、貴族の息子である恋人との関係も疎遠になって行く。

ある夜老人が乱暴された上に盗難にあったショックであっけなく絶命して果てる。その葬儀が済むと家賃の滞納を盾にとって乗り込んできた家主が、ゼル

を退去させるために強引に窓枠を剥ぎ取ると壁が崩れて、何と金貨のカーペットが現れた(“ From end to end, the apartment was literally carpeted with gold! ”)(34)。その上紙幣と外国債が割れ目や裂け目に隠してあったのである。

大金持ちになったゼルを後見人が馬車で連れ去った後一人残されたチャールズ・トリローニィは空腹のあまり気絶して倒れてしまったが、目が覚めてみると両親の許に居たのであった。昏睡状態の間に名前や住所を口走ったために救出されたという次第。

その後別の学校に入り、長じてからは竜騎兵連隊の中尉としてダブリンに滞在していた時、アイルランド総督を送る舞踏会でゼルと再会することとなり、後は言わずもがな。当然の展開として、ゼルと結ばれて大金持ちとして幸福生活を送っているというのである。本篇もクリスマス作品らしい奇跡物語といってよいものであるけれども、どうもアクチュアリティの生動性が欠如しているという印象は払拭できそうもないようである。

はアミーリア・B・エドワーズの手になるもので、我が国でもイギリス怪奇短篇集などによく収録されている著名な作品である。

主人公兼語り手はジェイムズ・マレイ(James Murray)なる新婚の弁護士。舞台は20年前の12月の北イングランド。新妻を宿屋に残して一人で雷鳥の狩猟に出かけた主人公は雪が降り出した暗闇の中で途方に暮れるが、一人の老人と出くわし、彼が使用人として勤めている一軒の家に案内される。そしてこの家の主人である23年間も世を捨てて隠遁生活を送っている老科学者と夕食を共にした後、追い立てられるように出発して、先程の老人をガイドとして雪は止んでいたものの厳寒の中を馬車が通る街道へ辿り着く。その時老ガイドから9年前に起こった夜行定期便馬車が50フィート下の谷底に転落して4人が即死し、残

りの2名も翌朝落命して果てた事故で、石造りのガードフェンスが崩落している場所にはくれぐれも注意するように言われる。

老人と別れて街道を進み出したが、厳寒の中で呼吸すら困難を覚え始めていた主人公は、一フィートの雪の中をランプを煌々ときらめかせながら軽やかに進んでくる一台の馬車を認める。眼前で停止した馬車に主人公は当然のごとく扉を開けて乗り込むが、御者、車掌、屋根の一人の乗客、そして中に乗り合わせている三人の乗客達全員の態度が何とも冷然としたもので。更に異様な臭いに包まれていた上に、全てが腐りかけ崩壊寸前の状態にあることに気付いたのであった。主人公は悲鳴をあげ扉を開けて飛び出そうともがいたが、その途端に月光で照らし出されたのがガードフェンスが破壊された場所で、そこから9年前と同じく馬車は転落して谷底にぶつかり、主人公も闇に包まれたというのである。

... I saw the moon shining down through a rift of stormy cloud
the ghastly sign-post rearing finger by the wayside the broken
parapet the plunging horses the black gulf below. Then, the
coach reeled like a ship at sea. Then, came a mighty crash a
sense of crushing pain and then, darkness. (40)

意識が戻り目が覚めた主人公は妻の看病を受けていることに気付く。谷底で気絶して倒れていたのを羊飼いににより救出され、外科医の手当てを受けたのであった。腕を折り頭蓋骨にひびが入っていたが、若さと体力がものをいって、その後回復に向かったという。

本篇はディケンズ以外の作家の手になる作品の中では、流石に人口に膾炙しているだけあって、出色の出来映えを示している作品である。

の主人公兼語り手はジェイン・メドウズ(Jane Meadows)という娘で、舞台

はスコットランドのラトリングホープ(Ratlinghope)なる村である。ジェインと3歳年下の副牧師を勤めるオウエン・スコット(Owen Scott)をめぐって作品が展開して行く。

ジェインはオウエンを一途に愛しているが、彼には教区牧師の娘に当たるアデレード・ヴァーノン(Adelaide Vernon)という結婚を約束した恋人が居る。ところが、その結婚式の当日アデレードが姿を消す。搜索の限りを尽くしても彼女の消息は杳としてつかめない。

アデレードの失踪から約 年後オウエンがジェインに求婚し、それをジェインが受け入れて遂に結婚することとなったのである。新婚旅行を終えてアデレードの両親が居住する牧師館へ出向いたジェインは、母親であるヴァーノン夫人から思いもかけない告白を聞くこととなる。アデレードを金持ちの甥と結婚させたかったので、阿片吸引の発作が激化した時に自分が伏せる奥の部屋(誰も立ち入ることのできない)に閉じこめて阿片を与え続けて眠らせてきたが、慢性の中毒患者となってしまったこと等の。

救出されたアデレードと再会したオウエンは激しく動揺し混乱をきたすが、ジェインへの愛は変わらなかったというのである(47)。アデレードも伴侶を得て落ち着いたということで、主人公の純愛が成就したという作品であるけれども、設定がどうも都合の良すぎる点が目に付くし、オウエンの心理面にも少し無理があるように感受される。

以上で他の作家の執筆になる作品への言及を終えて、*Legacy*の核を成すディケンズ自身の作品に対する分析と考察を展開して行くこととしたい。

1864年のディケンズは長篇における最後の完成作品となった*Our Mutual Friend*⁶⁾の月刊分冊の執筆と出版に忙殺され続けたとあってよい。そうした中で*Legacy*の執筆は10月1日⁶⁾から10日頃⁷⁾にかけて行われたと思われるが、自分

が担当した二章分の創作は分量的にはそれ程でないとしても、OMFとの同時進行はディケンズにとって流石に負担が掛かったようである。同じくウィルズ宛の書簡で「*Legacy*の執筆で疲れがたまっただけで海岸にでも行って休みたい」⁸⁾と洩らしているからである。だが、ここまでの21篇のクリスマス物の作品群の執筆のそれと比べると、多少なりとも心身に掛かる負担が緩和される側面も存していたのではあるまいか。*Mrs. Lirriper's Legacy*が前年のクリスマス作品である*Mrs. Lirriper's Lodgings*の続篇もしくは姉妹篇として構想され執筆されたことは、こうしてタイトルを眺めただけでも一目瞭然のことであり、全く新しい作品を推進し創作する場合と比較すると、それなりにゆとりを持ったペースとリズムで作業を進めてゆくことが可能であったと思われるからである。事実ディケンズはリリパー夫人の人間像にまるで実在の人物に対するような親近感と愛着を抱懐しながら執筆を進めている⁹⁾ので、尚更順調に執筆の筆が伸び進捗したであろうことは想像に難くない。*Mrs. Lirriper's Lodgings*が22万部というクリスマス物として最高の売り上げを記録したという事実¹⁰⁾も、プラス要因として作家に影響を及ぼしたことも見落としてはなるまい。今回も相当程度の売り上げが見込めるという前向きな弾んだ姿勢で、作家を執筆活動へ誘う要因となったことは指摘するまでもないことである。

だが、リリパー夫人を前年の9月13日に74歳で他界した母親エリザベス(Elizabeth Dickens)の面影を宿した人間像の持ち主として創造した点¹¹⁾に、ディケンズをして今一度主役として登場させることを思い立たせた最大の要因があるといってよい。債務者監獄に収監されて家族の生活を破壊したばかりでなく、そのために学校を止めざるを得なくなった12歳の息子であり長男でもあったディケンズを、他の弟妹達のように獄舎内に連れて行く代わりに独り娑婆に置き去りにした父親以上に、父親が何とか恩赦で出獄できて仕事に復帰した

後も、息子が屈辱感を嘔みしめながら働いていた靴墨工場を辞めることに反対した母エリザベスに対して、ディケンズが癒し難い断絶感と怨念を燃やし続けていたのは周知の事実である。それはそれとして、2年以上に渡って心身共に衰えが急速に進み、遂には絶命して果てた母親に対して、この時51歳に達していたディケンズがおのが内なる母親像を凝視し投影させた人間像として創り出したのがリリパー夫人であり、その作品が*Lodgings*であったのである。40年越しの報復的情念を燻らせながらの屈曲し複雑な形をとった作業であるだけに、*Lodgings*一作だけでは得心が行く十全な発露がなされたとは到底思えず、その続篇として*Legacy*を構想することを通して、リリパー夫人を再び登場させることで母エリザベスへのおのが心情や想念を、今一度見つめ直し掘り下げた姿勢で表白したいとディケンズが考えたとしても、何ら不思議ではないし、当然の心的事象といってよいであろう。

これから*Legacy*を対象とする分析と考察を行うこととなるけれども、その主筋がサンス(Sens)なるフランスの小さな町を舞台として展開される後半部分に存することは指摘するまでもなく明らかである。このメインストーリーに辿り着くまでに三つのエピソードが出来る。

最初のエピソードは結婚して一年余りで不慮の事故死を遂げた亡夫の末弟ジョシュア・リリパー(Joshua Lirriper)をめぐるものである。リリパー夫人をうら若き寡婦とした40年前のこの痛ましい出来事に遭遇した時、ジョシュアは僅か7歳であったという。その後亡兄を想い続けているという口実の下に、孫として養育してきたジェミィ・ジャクマン・リリパー(Jemmy Jackman Lirriper)から喪服代として1ソヴリン詐取した義弟の行為を、リリパー夫人は亡夫の身内ということで大目に見ていたが、実体は飲んだくれて裁判に掛けられたこともある碌でなしであり、結局は“Bandit”(410)¹²⁾の役で芝居に出て

いるという噂を聞きつけたところで、ジョシュアについての記述は幕となる。

二番目のエピソードは徴税官(collector)のバフル氏(Mr. Buffle)をめぐるものである。尊大で高飛車な物腰が町内の誰からも嫌悪されていた上に、取り立てた税金を着服しているのではないかと疑われていたバフル氏の家がある晩燃え上がる。最初着服の事実を隠蔽するために自宅に放火したという白い眼で周囲から見られていたバフル氏を、*Lodgings*に引き続き本篇でもリリパー夫人が経営する下宿屋に居住してパートナーのごとき存在となっているジャクマン少佐(Major Jemmy Jackman)指揮下の面々が救出して、下宿屋に運んで来るといふ場面が持ち上がる。

Presently what should we see but some people running down the street straight to our door, and then the Major directing operations in the busiest way, and then some more people and then carried in a chair similar to Guy Fawks Mr. Buffle in a blanket! (413)

バフル氏に引き続きバフル夫人と娘もジャクマン少佐率いる一隊により救出され、更に相思相愛の仲でありながら父親により認められていなかった年季奉公中の若者も救い出されて、父親バフル氏が反省の弁を述べて娘とその若者との結婚を許す態度を示す。バフル氏とリリパー夫人、そしてジャクマン少佐がすっかりうち解けた親しい間柄となったという記述が展開されている。この徴税官をめぐるエピソードは上掲の引用文からも感受されるように、作者自身が大いに楽しみ¹³⁾快適なテンポでこのドタバタ調が顕著な場面の執筆を進めていることは述べるまでもあるまい。

三番目のエピソードは同じ界限で下宿屋を営むミス・ウーゼナム(Miss Wozenham)をめぐるものである。長年のライヴァルとして渡りあってきた同業

者が突然破産したという報に、リリパー夫人はある日メイドを通して接する。続けて次のような説明が出て来る。

And we had the tea and the affairs too and after all it was but forty pound, and There! she's as industrious and straight a creeter as ever lived and has paid back half of it already, and where's the use of saying more, particularly when it ain't the point? For the point is that when she was a kissing my hands and holding them in hers and kissing them again and blessing blessing blessing, I cheered up at last and I says "Why what a waddling old goose I have been my dear to take you for something so very different!" "Ah but I too" says she "how have I mistaken you!" (416)

どうもミス・ウーゼナムの許へ駆けつけた主人公兼語り手は返済できない負債が40ポンドに過ぎない事実を聞き出すとそれを貸してやり、ミス・ウーゼナムも律儀にその半分程は返した様子である。その上当然の成り行きとして、リリパー夫人とミス・ウーゼナムとは積年の齟齬と行き違いが氷解して、親和関係を結ぶ場面が現出しているのである。いかにも主人公の人間性に相手が感動し頭を下げへりくださる形で仲直りが実現したという記述が繰り広げられている。クリスマス作品らしさを感じさせる趣向だといえば確かにそうだが、自慢話めいた臭みが鼻につく点は避けられそうもない。孤独な初老の人間同士だから情の通い合う相互関係が現出するのは、少なくともほっと安堵できる心温まるシーンであることは否定できないが。

喜劇風やら人情劇風のエピソードで助走をつけて、*Legacy*は後半部のメインプロットへと移って行く。

それはある年の6月23日フランス領事館から一人の外交官がリリパー夫人を突然訪ねて来たことに端を発して、展開することとなる。外交官氏は主人公に対して、フランスのサンスでいまわの際にいる身元不明の、そして口も利けぬ程衰弱しきっているイギリス人の男性が、カードのハートのエースの裏に「自分が死んだらロンドンのリリパー夫人へ残したものを遺産として送ってほしい」と書き残している、というような事情の説明を行う。それ以外には書類も旅券もないので手掛かりとなるものは皆無であると、雲をつかむような話をリリパー夫人に聞かせる。フランスに親類、友人、知り合いは居ないのかと質問された主人公は一切ないと答えて、首をかしげるばかりであり、更にこれまで下宿人の中で思い当たる人物はないかとの問いにも、ないと答えるばかりであったが。結局ジャクマン少佐と相談の上、夏休みで寄宿学校から帰館するジェミィに休みの間に何処かに連れて行くと以前から約束していたこともあり、三人でサンスに赴くという軌跡を描くことになる(419)。

かくして、ドーヴァー海峡を越えてフランスに入ることになる訳だが、その時の主人公の感懐は次のようである。

And when we came to the sea which I had never seen but once in my life and that when my poor Lirriper was courting me, the freshness of it and the deepness and the airness and to think that it had been rolling ever since and that it was always a rolling and so few of us minding, made me feel quite serious. (420)

亡き夫から求婚された時以外は一度も見ることのなかった海の悠久の深さ、新鮮さ、清々しさ等にリリパー夫人は改めて接して、亡夫の記憶と結び付く形で思いを致し、しみじみとした気持を抱懐している。*Dombey and Son*(1846-48)あたりからディケンズではよく出てくる発想であり叙述ではあるけれども、こ

こは他の箇所とは趣を異にするものが感受されよう。1858年の妻キャサリン (Catherine Dickens, 1815-79)との離婚により家庭を崩壊し家族を分裂させたディケンズは、その前年主宰する素人劇団に出演を依頼したことが契機となって知り合い以後愛人とした女優エレン・ターナン (Ellen Ternan, 1839-1914)を母親ともどもフランスに住まわせて、隠密裡に会いに行くという生活様式をとるようになっていた。特にエレンが妊娠し秘密裡に出産を行ったとされている¹⁴⁾1862年秋頃から1863年にかけては、頻繁に行われることとなった。そしてエレン・ターナンのフランス居住は、1865年6月9日彼女と(多分母親も一緒に)乗り合わせたドーヴァー発ロンドン行きの列車が途中ステイプルハーストで引き起こした鉄橋からの転落事故に遭遇するまで続いた¹⁵⁾と思われる。それ故、フランス滞在中はイギリスのそれと比べると若干は緩和されることがあったとしても、払拭不能の背徳者意識に付きまといわれていた上に、愛人の存在と子供の出産と死という重い秘密を抱え込んだ暗く鬱屈した内面状況を凝視しながら、海が傷つき彷徨する精神と魂をいささかでも癒し慰めてくれる存在であったことは十分に看取されることである。上掲の引用文においてリリパー夫人の言葉を通して海の大いなる力を讃えている叙述は、ディケンズ自身のそうした心理状態が投影されたものといつてよいであろう。

パリを經由してサンス入りしホテルに投宿したりリパー夫人は、翌日一人で病床に臥せている問題のイギリス人と面会する。しばしベッドの傍に座している内に彼女は病人の正体に気付く。

But by slow degrees his sight cleared and his hands stopped. He saw the ceiling, he saw the wall, he saw me. As his sight cleared, mine cleared too, and when at last we looked in one another's faces, I started back and I cries passionately:

“ O you wicked wicked man! Your sin has found you out! ”

For I knew him, the moment life looked out of his eyes, to be Mr. Edson, Jemmy's father who had so cruelly deserted Jemmy's young unmarried mother who had died in my arms, poor tender creetur, and left Jemmy to me. (424-25)

前作 *Lodgings* でエドスン夫妻と称してリリパー夫人の下宿に身を寄せてから3ヶ月後に、夫が避けられない用事ができたという口実の下に、身重の妻を置き去りにしてマン島へ旅立っていった。その後夫から短い手紙を一度受け取っただけのエドスン夫人がテムズ河で投身自殺を図ろうとしたのをリリパー夫人が押しとどめる場面が出来し、出産で全力を使い果たしたエドスン夫人はリリパー夫人の腕に遺子を託して、天国へ旅立って行ったのであった。それから10年余りが経過した時点で、リリパー夫人とエドスン氏が思いがけない再会を遂げた場面であり、内縁とはいえ妻を捨て、胎内にできていた子供まで捨ててかえり見ず、この再会まで身勝手な振る舞いに明け暮れたエドスンであってみれば、異郷の地で誰に看取られることもなく、孤独で惨めな最期を迎えたのは当然の報いだ、というリリパー夫人の怒りの声が発せられている場面でもあるのである。とりわけ “ Your sin has found you out! ”¹⁶⁾ という旧約聖書の言葉を踏まえて出て来ているセリフがそうである。これはリリパー夫人からエドスン氏に発せられたセリフの形をとっているけれども、作者ディケンズがおのが所業に向けた痛切な叫びとも思える箇所である。妊娠した内縁の妻を見捨てたエドスンの行為は、ディケンズ自身の愛人エレン・ターナンの妊娠と出産をフランスで密かに処置して、ひた隠しにした振る舞いと通じるものがあり、罪深い救われようのない、否母親以上かもしれない所業を犯し重ねているとの痛切な自己告白がなされているように思えてならない。と同時に、リリパー夫人に母親

の面影を宿しているとなると、母親だけを責めたり断罪できないという想いも流露しているように感受されるのである。

His arm dropped out of the bed and his head with it, and there he lay before me crushed in body and in mind. Surely the miserablest sight under the summer sun! (425)

これ程罪深く惨めな姿はないとトリパー夫人は極め付けているが、上からの流れでいうと、作者自身の同工の姿が描き出されているということになり、何とも醜悪で哀れな姿がさらけ出されている感じで、癒しも救済も自己正当化も何もあったものではない、という印象が強く迫ってくるばかりである。

As I lifted my eyes up to the clear bright sky, I saw the high tower where Jemmy had stood above the birds, seeing that very window; and the last look of that poor pretty mother when her soul brightened and got free, seemed to shine down from it. (ibid.)

恨み骨髓に徹している筈のエドスン夫人とその子ジェミィがこの男に救いと許しを与えているように思えた。空に輝く教会の二つの塔が本来なら許される筈のないエドスンが横たわっている部屋の窓を、そういう感じで見ているように思えた、トリパー夫人は述べているが、彼女を通してではあるけれども、作家自身のエレン・ターナンと私生子として生まれたわが子からの許しを期待しての描写が繰り広げられているのであろうか。

“O man, man, man!” I says, and I went on my knees beside the bed; “if your heart is rent asunder and you are truly penitent for what you did, Our Saviour will have mercy on you yet!”
(ibid.)

晴れた空。陽光を受けて輝く教会の塔。それと関連してのエドスン夫人とジェ

ミィの気高いイメージ。これらを踏まえて神というかイエス・キリストが持ち出されて、許しも完璧の域に達したという感じで、本篇がクリスマス物に属する作品であることを思うと、当然至極の展開ではあるが。

続けてリリパー夫人はジェミィと対面させるが、貴男が父親である事実は伏せたままで行うこととしたい。又貴男のような父親が居るという事実は、あの子の為にも、あの子の母親の為にも、未来永劫伏せたままにする、と宣言する。

“ He has been kept unacquainted with the story of his birth. He has no knowledge of it. No suspicion of it. If I bring him here to the side of this bed, he will suppose you to be a perfect stranger. It is more than I can do to keep from him the knowledge that there is such wrong and misery in the world; but that it was ever so near him in his innocent cradle I have kept from him, and I do keep from him, and I ever will keep from him, for his mother's sake, and for his own. ” (426)

この中で“ there is such wrong and misery in the world ”という箇所を、ディケンズはどのような想いを抱きながら認めたのであろうか。エレン・ターナンとの間に生まれた子供はまさにジェミィ・ジャクマン・リリパーと同じ立場、境遇に置かれているからである。それに罪深さの点においても、ディケンズ自身が同工の行為を犯しているからである。ここまで来ると、リリパー夫人という1863年と64年の2年間に及ぶクリスマス作品の主演兼語り手を勤める初老の婦人は、ディケンズの母親エリザベス・ディケンズの面影とイメージを持ち、息子としての贖罪の意を込めて創造されているという最初のレベルを超えて、作家自身にとって癒しと救済をもたらす存在に昇華しているという機能、役回りを付与されてきている、と解釈できるのではないか。余りにも虫が良い

ざる設定であり叙述であると言ってしまうえば、まさにそれ以外の何物でもないのではあるが。

いよいよエドスの最期の場面を迎えることとなる。

“ My darling boy, there is a reason in the secret history of this fellow-creetur lying as the best and worst of us must all lie one day, which I think would ease his spirit in his last hour if you would lay your cheek against his forehead and say, ‘ May God forgive you! ’ ”

“ O Gran, ” says Jemmy with a full heart “ I am not worthy! ” But he leaned down and did it. Then the faltering fingers made out to catch hold of my sleeve at last, and I believe he was a-trying to kiss me when he died. (427)

ジェミィにリリパー夫人が事情はともかくこのかつての下宿人は、ぼくが頬をこの人の額に置き神の祝福を讃えてあげると、きっと喜びながら旅立って行くと言明し、それを受けたジェミィが「その資格はない」と断りながらも、言われた通りのことをして実の父親の最期を看取る、という設定は何とも出来過ぎという印象は拭えそうもない。

それにしても“ I am not worthy! ”¹⁷⁾というジェミィに言わせている言葉を作者はいかなる意図の下に持ち出したのか。『ルカによる福音書』の有名な「放蕩息子」のたとえが描かれている箇所、放蕩の限りを尽くして目の覚めた次男が父親に対して言明したセリフだとして、キリストの口を通して用いられている言葉をジェミィに言わせることで、つまり作品中で不義の子、私生子であるおのが息子に同一のセリフを言わせることで、癒しと救いを、罪の軽減を少しでも得ようとし、図ろうとしたのであろうか。或いは母親への怨念の裏

返しである許しと詫びを入れる姿勢を、リリパー夫人を通して描こうとしたのであろうか。先述したごとく、彼女の役割は次第に母親エリザベスの面影から離れ逸脱している可能性が強いと思われるのではあるが。

エドスンを送った後もサンスにしばらく滞在を続けたリリパー夫人、ジャクマン少佐、ジェミィの三人がホテルのバルコニーから、夕陽と教会の塔を見つめる場面は次のようである。

But every evening at a regular time we all three sat out in the balcony of the hotel at the end of the courtyard, looking up at the golden and rosy light as it changed on the great towers, and looking at the shadows of the towers as they changed on all about us ourselves included,... (428)

三人を大きく深く包み込む教会の塔の影を含めて、その塔の上で変化して行く「黄金とバラ色の夕陽」をホテルのバルコニーから見つめる三人の姿が、親和に満たされた至福の頂点にあることは述べるまでもなく明らかである。クリスマス物の系譜においても、*A Christmas Carol*を始めとして、*The Battle of Life*(1846)や*The Haunted Man*(1848)など枚挙にいとまがない程、ディケンズ文学では頻出する場面であり描写であることは今更指摘するまでもない。クリスマス物の作品の場合は作家にとって格別の重みと意義を持っている、と解すことができよう。本篇の場合もそのように感受される。この場面でディケンズの内面や神経がいささかなりとも癒され救われることはあったのであろうか。

続けてAYRに掲載されている7章立ての*Legacy*では掉尾を飾るを見て行くこととしたいが、本章では*Legend*でも示されていたジェミィのお伽噺作者としての一面が発揮されているのである。

サンス滞在も最後を迎えた夜のことであった。ジェミィがリリパー夫人とジ

ヤクマン少佐を前にしてお伽噺仕立てのエドスン物語を語って聞かせたのは。前作では10歳という設定であったので、この時のジェミィの年齢は11,2歳ということになるのか。

ジェミィは語る。父親の推す資産家の娘との縁談を拒否して、好きな相手との駆け落ちを強行して苦労しながらおのが下宿屋に回って来た縁で、リリパー夫人が親身になって面倒を見てやったと。そして、エドスン夫妻は不滅の愛を相互に抱き合いながら貧乏生活に耐えていったけれども、息子の誕生と引き換えに妻が「病に掛かり、衰弱し、そして他界した」(“sickened, drooped, and died”)(431)というジェミィの語り之余りにも的確にエドスン夫人の最期を言い当てていたために、リリパー夫人が鸚鵡返しで“Ah! Sickened, drooped, and died!”(ibid.)とつい吐露してしまう場面が出来する。ジェミィは生来の利発さも手伝って案外真相を看破していたのではないかとも思える場面でもある。

もっとも、ここからジェミィの語りは実相からは逸脱して行く。

“But unhappily he was like his mother in constitution as well as in face, and he died too before he had grown out of childhood.”

(432)

母親のエドスン夫人のみならず子供まで幼くして他界したというこの語りもジェミィの子供なりの配慮によるものか、それとも思い浮かぶまま素直に紡ぎ出したものがあるかは定かではない。それはそれとして、叙述を進めている作者自身の想念はいかなるものであったのか。

ジェミィの語りは次のごとく締めくくられる。

“And because she had her grandson with her, and he fancied that his own boy, if he had lived, might have grown to be something

like him, he asked her to let him touch his forehead with his cheek and say certain parting words.” (ibid.)

ジェミィに頬を死に行くエドスの顔に当てて別れの言葉を言わせるように、エドスがリリパー夫人に頼んだ。余りにもジェミィが幼くして他界したおのが息子を彷彿とさせるので、というジェミィのこの締めくくりのセリフは、彼自身が事の真相に気付いている事実と、それを踏まえてのお伽噺仕立ての物語を展開していることを、ありありと感受させることは述べるまでもない。それにしても、母親エリザベスの面影を宿すリリパー夫人や私生子として出生したジェミィ・ジャクマン・リリパーを登場させているディケンズの内面の推移は、相当に屈曲して翳りのある複雑なものがありそうだが。或いは美化、自己正当化、救済、癒し等々で説明でき得る心情も存在していたのであろうか。

“ Treachery don't come natural to beaming youth; but trust and pity, love and constancy, they do, thank God!” (ibid.)

本篇*Legacy*の結びとなるリリパー夫人の「裏切りは子供、青年とは当然無縁だ」というこのセリフは、作者がおのが自身の子供時代を回顧してのものなのか。それともエレン・ターナンとの間の私生子誕生の責任を引き受けた言葉なのか。それともその両方なのか。

ジェミィのエドスをめぐるお伽噺仕立ての語りの中の“ the green Past ” (ibid.)という表現は興味深い。*The Haunted Man*のテーマである“ Lord, keep my memory green.”のエコーであることはいうまでもない。作者自身にとって過去の記憶と回想は‘ green ’なるものがあつたのか。現在との対比において。*The Haunted Man*においては主人公レドロー (Redlaw)の“ I have lost my memory of sorrow, wrong, and trouble,...and with that I have lost all man would remember!” (391)¹⁸⁾という叫びより端的に看取できるところ、悲哀、

遺恨、苦痛などの〈負〉の記憶を対極の〈正〉の記憶と一体化させて内に抱え込み、対峙する姿勢を持続させることを通して、記憶を「緑なる」状態に保つことが成就できる、という認識が示されていた。この5作目のクリスマス作品が執筆されたということは、1848年の時点においては、〈負〉というか〈暗〉の記憶の忘却を願望する姿勢を指向することはあったとしても、その重圧を受け止めて何とか内面の均衡を保持させながら生き抜いて行くだけのエネルギーがディケンズの内に存在し得ていた、ということが指摘できよう。

それから16年の歳月が経過した1864年における状況は、*Legacy*と関連付けながらこれまで考察してきた通りである。これをもう少し補足すると、1863年12月24日の長年のライヴァルであると共に友人でもあったサッカレー(W. M. Thackeray, 1811-63)の他界¹⁹⁾に続き、12月31日には三男ウォルター(Walter Landor Dickens, 1841-63)がカルカッタの病院で動脈瘤のため数秒にして死去した²⁰⁾。その上追い討ちをかけるように、1864年11月29日には長年の友人であり*A Christmas Carol*や*The Haunted Man*の挿画も担当したことがあるリーチ(John Leech, 1817-64)が不帰の客となり、ディケンズを悲嘆のどん底に突き落としたのであった²¹⁾。かてて加えて、娘ケイト(Kate Dickens, 1839-1929)の夫チャールズ・コリンズ(Charles Collins, 1828-73)がドイツからフランスへと転地療養を試みても病気が悪化する一方で、ケイトがうら若い未亡人になりはしないかという不安と予感に付きまといわれる²²⁾という深刻な煩い事も抱えていたのである。

こういう風に列挙すると、相次ぐ肉親や友人の死去に直面して悲嘆にくれ孤独の影を長く引くディケンズの姿が浮き彫りにされてくるばかりである。先述したごとく、家庭と家族の崩壊と分裂を導いた上に、愛人の存在と私生子の誕生と死という極秘事項として隠蔽し続けたおのが行為の罪障の深さを認識する

につれて、その他界を転機として1864年の時点においては、母エリザベスへの怨念と妄執とは完全なる払拭は不可能であったとしても、次第に希薄化して和らぎ、ある程度までは是認し許容する心的態度が芽生えつつあったのではあるまいか。Legacyとその主人公リリパー夫人とを包む雰囲気には、それをまざまざと感受させるものが存していることはもう指摘するまでもない。リリパー夫人、ジャクマン少佐、ジェミィという血縁関係の全くない三人の親和力により成立している家庭世界が、所詮はリアリティの欠如したお伽噺的な幻影に過ぎないことは論を俟たないけれども、そうであるからこそ却って作者のこの空中の楼阁のごとき家庭に託した願望や希求を切ないまでに見てとることができよう。重く深く付きまとい締めつけてやまない孤立と寂寥に押し潰されそうになりながら、生の歩みをどうにか持続させ得ているディケンズが炙り出されてくるばかりである。

I got rid of a touch of neuralgia in France (as I always do there), but I found no old friends in my voyages of discovery on that side, such as I have left on this²³).

エレン・ターナンに会う目的もあったのか、クリスマスから新年にかけてディケンズは又してもフランスに足を向けている。顔面神経痛も癒された（友人が誰もいなくて淋しいとは言ってはいるが）と述べていて、一見開放感に浸っているように見える。だが、クリスマスシーズンに家族や友人を振り捨ててフランスへ逃避して迎えるクリスマスと新年は、ディケンズにとって如何なるものであったろうか。日常のしがらみから離脱しての安堵感があったかもしれないけれども、フランスの地で相手を勤めていた筈のエレン・ターナンとの間で孤独を埋めてくれるだけの相互交流が通っていたであろうか。ただでさえ日蔭の存在に過ぎない上に、既述したような事情が加わるとなると、答は否である。

表面上は従順であったとしても、内面には蟠りと屈曲した情念が渦巻いていたことは十分に想像できるからである。金銭で男になびく軽佻浮薄なタイプでないだけに尚更そうである。という事になると、結局はイギリスに残るよりは気楽に寛げる面は存していたであろうが、絶望的なまでに孤独の想いを嘔みしめながらのクリスマスを迎えた、というのが実相であろうと思えてならない。

*Legacy*における相互に信頼と慈愛が通い合うリリパー夫人を中心とする世界と比較すると、想像を絶する程の落差が存していることは指摘するまでもなく明らかである。*Legacy*の作品世界ではいかにもクリスマス作品らしく終局的には相互の絆がますます深まり強くなる舞台として登場させているフランスにおいて、一人淋しく迎えるクリスマスが母国イギリスで迎えるそれよりは癒されるし安堵できるというのは、孤立感と虚無感の果てしなく広がり伸びている大いなる影にディケンズが完全に呑み込まれて、疲れ切り精根尽き果てた惨々たる状態に陥っていることを意味していることも、もはや述べるまでもない。

(注)

- 1)以下 *Legacy*と略す。
- 2)以下 *AYR*と略す。
- 3)以下 *CS*と略す。
- 4)*AYR*の11頁では“Story”が“Legend”となっている。
- 5)以下 *OMF*と略す。*OMF*の執筆は1863年10月から開始され65年9月に終了したが、月刊分冊は1864年5月から翌65年11月にかけて刊行された。
- 6)10月1日付のW. H. Wills宛の書簡を参照のこと(*The Letters of Charles Dickens*, vol. 10 1862-1864, ed. Graham Storey, Oxford: Clarendon Press,

1998, p. 431)。

7)10月8日付のWills宛の書簡に“Mrs. Lirriper will be in your arms, I trust, two or three days hence...”とあるので、10月10日頃には終了したと思われる(*The Letters of Charles Dickens*, vol. 10, p. 435)。

8)“I am something the worse for work, and have an idea of going to sea for a day or two about Friday next.”(*The Letters of Charles Dickens*, *ibid.*)

9)10月10日付のWills宛の書簡の中で“she [i. e. Mrs. Lirriper] is nothing but a good 'un”というリリパー夫人への親近感と愛着を示す言葉が使用されている(*The Letters of Charles Dickens*, p. 441)。

10)Norman Page, *A Dickens Chronology* (Houndmills: Macmillan, 1988), p.114.

11)リリパー夫人とエリザベス・ディケンズとの関わりについては拙論「1863年のCharles Dickens *Mrs. Lirriper's Lodgings*と*The Uncommercial Traveller*の考察を通して」(福岡教育大学紀要第51号, 第1分冊, 2002, 9頁~21頁)を参照のこと。なお、以下*Mrs. Lirriper's Lodgings*を*Lodgings*と略す。

12)*Legacy*からの引用は本文、頁数ともThe New Oxford Illustrated DickensのCSによる。

13)10月8日(?)付のJohn Forster宛の書簡の中で、ディケンズはバフル氏をめぐる場面について“so extraordinary droll”と述べている(*The Letters of Charles Dickens*, p. 435)。

14)Cf. John Bowen, “Belle and ‘His Boots’: Dickens, Ellen Ternan and the *Christmas Stories*”(*The Dickensian*, vol. 96, 2000, pp. 202-07).

なお、エレンが出産した乳児はほどなく他界したと推定されている。

15) Clair Tomalin, *The Invisible Woman: The Story of Nelly Ternan and Charles Dickens* (New York: Alfred Knopf, 1991), pp. 147-48.

16) “Behold, ye have sinned against the Lord: and be sure your sin will find you out.” (*Numbers* 32: 23)というモーセの言葉を踏まえて使用されている語句である。

17) “And am no more worthy to be called thy son: make me as one of thy hired servants.” (*St. Luke* 15: 19)というキリストの言葉を出典としている。

18) *The Haunted Man*からの引用と頁数はThe New Oxford Illustrated Dickensの*Christmas Books*による。

19) ディケンズはサッカレーとの間で1858年以来続いていた疎遠状態を1863年5月に修復したばかりのところ、サッカレーの死去という衝撃に襲われたのである。

20) ディケンズがウォルターの突然の他界を知ったのは1864年2月になってからであった(*A Dickens Chronology*, p. 114)。

21) 11月1日(?)付のJohn Forster宛の書簡において “This death of poor Leach...has put me out woefully.” と、ディケンズはリーチの死に茫然となって悲しみに沈むばかりであると告白している(*The Letters of Charles Dickens*, p. 447)。

22) 10月25日付のW. W. F. De Cerjat宛の書簡を参照のこと(*The Letters of Charles Dickens*, p. 444)。

23) 12月31日付のB. W. Procter宛の書簡より引用(*The Letters of Charles Dickens*, p. 469)。

